

【37】 マングース哀歌

奄美大島で外来のマングースがはびこり、島の固有の小動物が絶滅の恐れありとして心配されていたところ、このたびマングースが根絶されたと環境省から発表がありました。

奄美大島は沖縄と同様、古くから毒蛇ハブの被害に悩まされてきたのですが、昭和 54 年にハブの天敵になるとして 30 匹のマングースを移入したのが事の始まりです。

奄美にはマングースの天敵となる動物がいなかったのも、その数が急激に増加し、20 年後の平成 12 年には 1 万匹を数えるまでに到りました。

地域固有のウサギ、ネズミ、カエルなどの小動物が餌となり、絶滅の危機に瀕したので、環境庁が乗り出し、以来 20 年の歳月、35 億円の経費、そして多くの人々の努力を費やし、累計 3 万匹を駆除したのです。

マングースにしたら、頼みもしないのに異郷に連れてこられ、増えたら退治されるとは『そりゃあんまりでござんせんか』と言いたいところでしょう。

マングースはイタチに似た体長数十センチのジャコウネコ科の小動物ですが、それがどうして猛毒で恐れられているハブを退治してくれると思ったのでしょうか。

いくらマングースだって他に食料があればわざわざ危険なハブなど狙う必然性が無いことは子供でも分かる話しです。

あれこれ調べると一つの手がかりがありました。

インドにもマングースがいるのですが、マングースと毒蛇のコブラを闘わせる見世物が盛んなのだそうです。

マングースは動きが敏捷で、コブラの毒牙を巧みに除けて相手を倒すので、それを見た外国人が、『こりゃ毒蛇退治にうってつけだ』と思ったのではないかというのです。

奄美、沖縄ばかりでなく、ハワイにも移入されたといえます。

動物に限らず植物もそうですが、その土地に無い生物を十分に研究せずに外部から安易に持ち込むものではないという教訓です。